

大市墓の出土品

「箸墓」の名で知られている倭迹々日百襲姫命の大市墓（奈良県桜井市大字箸中）について、墳丘の遺構保護のため昭和四十三年十一月に陵墓調査室の石田・戸原両室員が現状調査をした際、底部穿孔の壺形土師器、特殊器台形埴輪等の破片が採集された。以来、整理を行ってきた結果、前者の内一個は完形に接合することが出来、後者は全形を知るまでには至らないが、文様の一部などを察知できるようになったので、その後の採集品を加えて概要を紹介する。

一

出土地点（第1図）と出土状況は次のとおりである。

第1地点 後円部の五段築成の五段目の背後斜面裾寄りの中腹、台風で根起した木の切株の根にくわえこまれていたものを採集したもので、特殊器台形埴輪片と壺形埴輪破片である。

第2地点 後円墳頂部背後の肩から四～五メートル内側の平などころ。表土下の葺石の表面から特殊器台形埴輪一片と、葺石面の窪みに埴

輪小片を集めてあったものを採集した。これは新しい時代に葺石を取除いて、拾集した小片を埋めたものである。

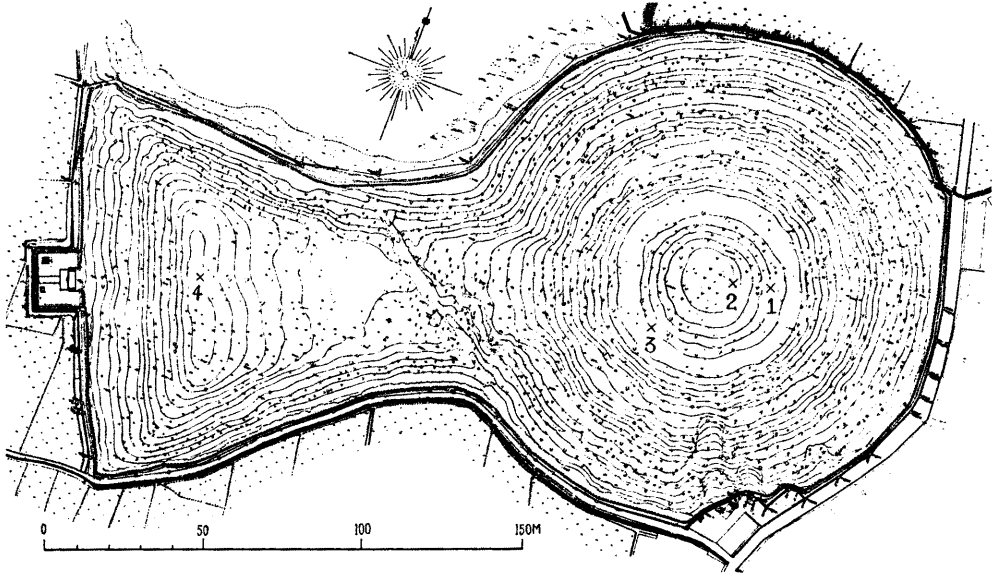
第3地点 後円部前面で五段目の斜面裾の箇所。風倒木の根起きした部分から特殊器台形埴輪破片を採集した。

第4地点 前方部墳頂中央部の後円部寄りの肩から斜面にかかる地点。地表下約二〇センチのあたりに粗い葺石状の石があり、その上と下は軟かい灰黒色の土で、その中に大破片を交えた壺形土師器の破片がたまって検出された。これらは本来この位置に据えられていたと思われる状態は認められなかった。またこの地点で特殊器台形埴輪の小破片一箇と須恵器甕を検出した。

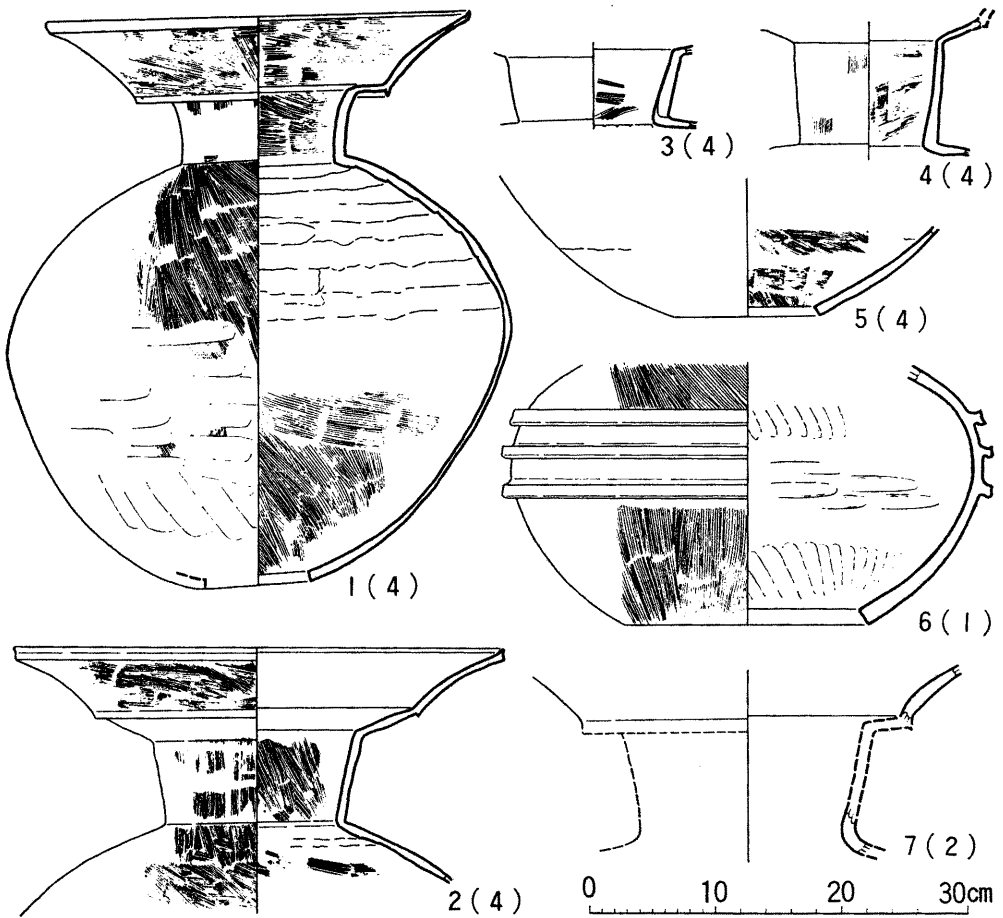
（中村 一郎）

一一

大市墓の出土品は、壺形の土師器と埴輪、特殊器台形の埴輪そして須恵器の甕がある。甕は、古墳時代後期中頃のものと思われるので、ここでは省略し、以下それぞれについて説明する。なお、遺物の出土地点は



第1図 大市墓出土位置図



第2図 大市墓の出土品(縮尺1/6)

図示した出土品の番号の後にカッコでくくって示しておく。

(一)壺形土師器(第2図1~5)(図版1~4)

すべて前方部の第4地点から出土したものである。

半球形の胴上半~肩部に、わずかに外開きのほぼ直立する頸部を付し、いったん強く横方向か、これに近く屈曲する口縁部は、再び外上方に屈曲して外反し、端部を断面三角形になるように肥厚させて内外面に稜を作つて終る。口縁部の屈曲部は、内面に稜を作るとともに外面には粘土紐を断面三角形になるように貼付けて垂下させ、明瞭な段を設けている。胴部最大径が中央よりわずかに上にあり、強く曲率を変えて上半部と区別される胴下半部は、直線的にすぼまった後、焼成前に穿孔された丸底に連なる。

胴下半部内面はハケ目調整を加え、中央部付近は横方向のヘラ削りを加えた破片が多い。外面は、ヘラ削りを、胴部中央から下半部に主に横方向に向け、底部近くでは斜または縦方向に向けた上に、胴部上半部では縦または斜方向のハケ目を加えている。上半部内面は、粘土紐を横上げて指オサエし、弱いナデをかけたままで接合痕が明瞭なもの(1)や、その上にハケ目を施す例(2)がある。外面はハケ目調整。口頸部は、ハケ目の上を横ナデしているが、十分ではない。3をのぞいて成形成・調整ともに、粗雑である。胎土は粗く、色調は独特の茶褐色を呈する。

胴部内面をのぞく全面に赤色塗彩を施す。

(二)壺形埴輪(第2図6・7)(図版5~11)

厚手で埴輪の粗雑な作りの、埴輪と呼んでよかろうと思われる壺が二種ある。

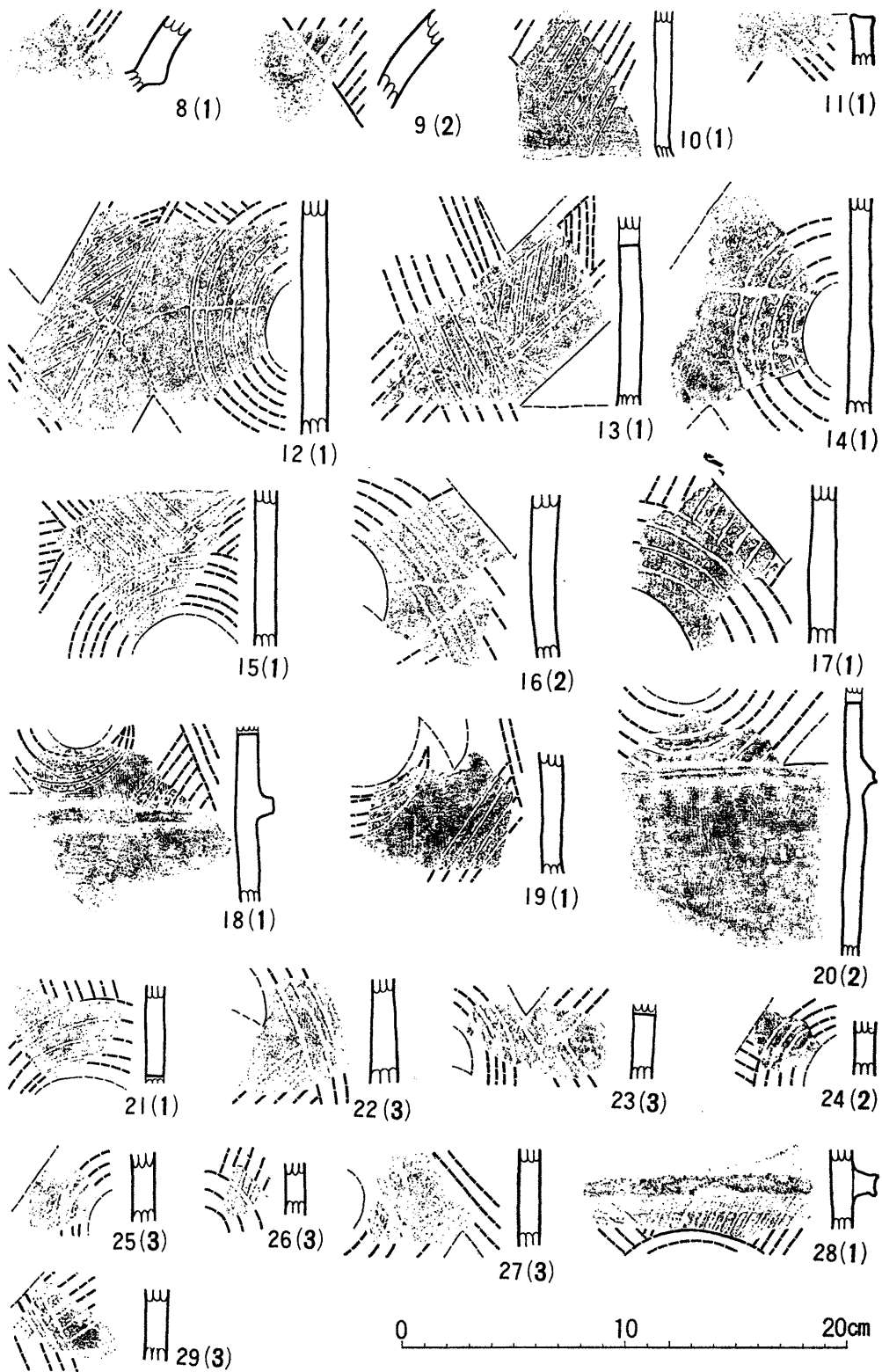
6は、互には接続しない大型破片二個から図上復原した、玉葱型の器形を示す特殊壺形埴輪の胴底部である。焼成前に大きく穿孔された底部は、内面を指でナデつけ、外面に粗い縦方向のハケ目を施す。急にすぼまる肩部は、内面を指でナデつけ、外面をハケ目調整したあと、なめらかに彎曲する胴部外面に、三条の突帯を貼付けて横ナデする。胴部内面は、横方向のナデつけ。

6より小さな同種の別個体の破片があり、これには、鮮かな赤色塗彩が遺っている(図版7)。

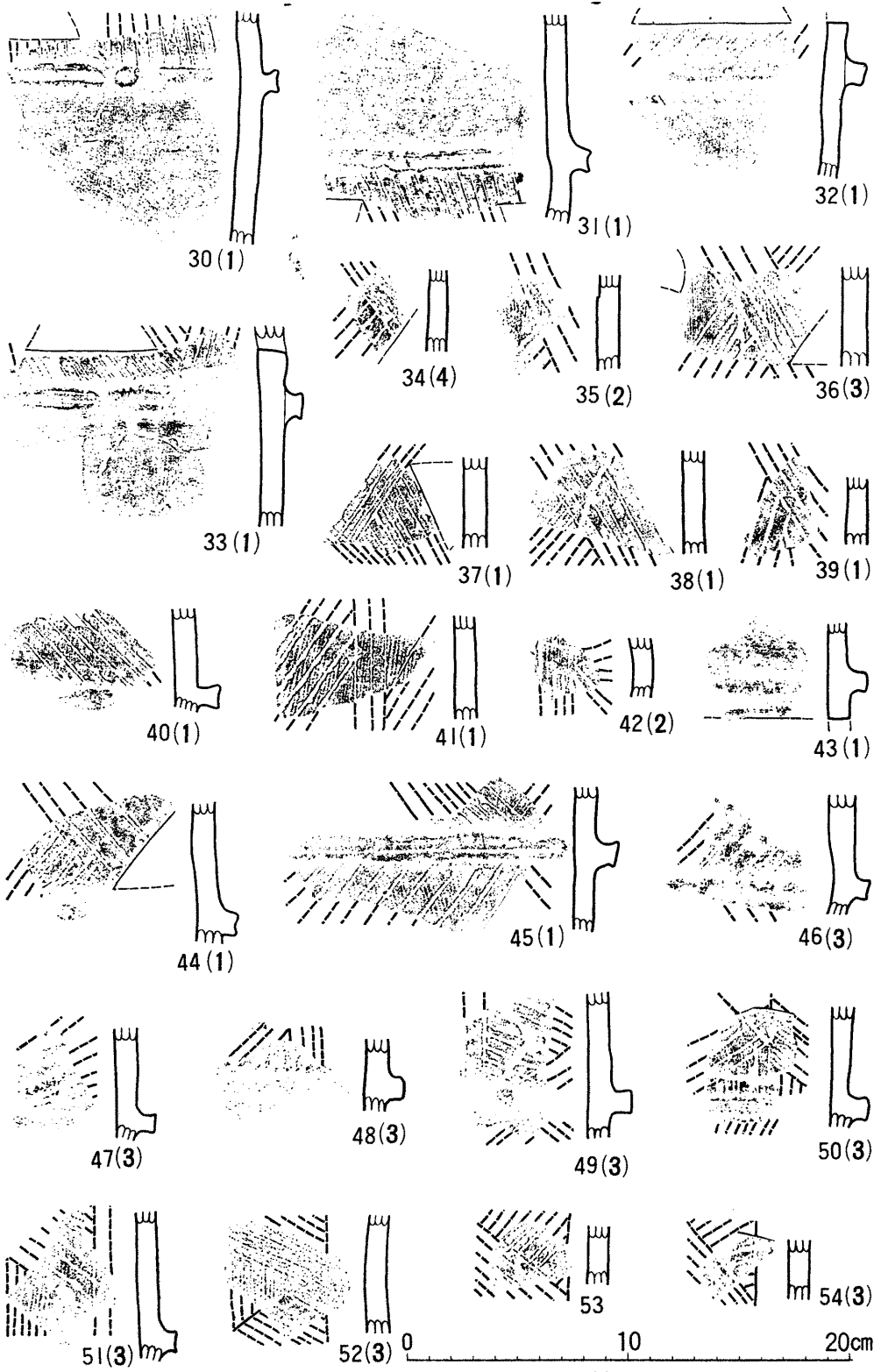
別の一種の壺形埴輪は、ごく小さな断片なので、確定的なことはいえないが、第2図7に示すように、有段口縁の壺形土師器に類似したもののように見受けられる。口頸部内外両面と肩部外面に赤色塗彩。黄灰色の埴質。同質の穿孔された底部破片がある。

(三)特殊器台形埴輪(第3図~第5図)(図版12~21)

断片的な破片ばかりで全形の知られるものはなく、縦横の方向が判つても、上下・左右の関係が判らぬものが多い。いく種類の文様があるかも定かでない。外面は縦方向のハケ目の上から、先の鋭く尖ったヘラで刻まれた沈線による特殊な文様が描かれている。その上を字義どおりの刷毛に似た工具で赤色に塗彩しており、その結果縦方向のハケ目が横方向の擦痕で消されたり、不明瞭になったりしている。沈線は、平均して巾



第3図 大市墓の出土品(縮尺 1/3)



第4図 大市基の出土品 (縮尺 1/3)

1ミリ、深さ1ミリと太くて深い断面三角形を呈し、その条数も多い。

口縁部（第3図8〜11・第5図57）

有段口縁のものがある（8・57）。8・9は、大きく外反するものようであるが、小破片なので確実ではなく、図示した以上に直立するかも知れない。10は直口縁であろうが、図を上下逆にしてわずかに端部の外反するものかも知れない。いずれにしても、これは、特殊器台形というよりは、円筒形埴輪として別類に属さしめるのが穏当であろうか。ヘラ描きの鋸歯文が横に連続して施こされるのであろう。肌荒れが著しいが、端部に横ナデの痕路が認められる破片がある（11）。

頸部は、57のように無文である。縦または斜方向のハケ目。

胴部（第3図12〜第5図56・58）

一段おきに施文するのを通則とする。18・20・30〜33・43に見られるように、ある文様帯の上下の段は無文帯となっており、58のごとく施文のない破片も数多い。しかし、45・46・55・56のように突帯をはさんで上か下かの段に文様を施す例もある。外面の調整は前述のとおりであるが、内面の調整は多様で、横または斜方向の粗いヘラ削りかハケ目を疎に加えている。ハケ目の上は、横ナデもしくはフキを施すこともある。

ヘラ描きの文様は、二種に大別できる。

そのひとつは、斜傾の葎手文と互に交接する斜線文とを組合せ、その構図にしたがって巴形と三角形の透孔をヘラで切抜いた文様を基本とする種類である。基本そのままの文様として16・17・23・27〜29・33〜39

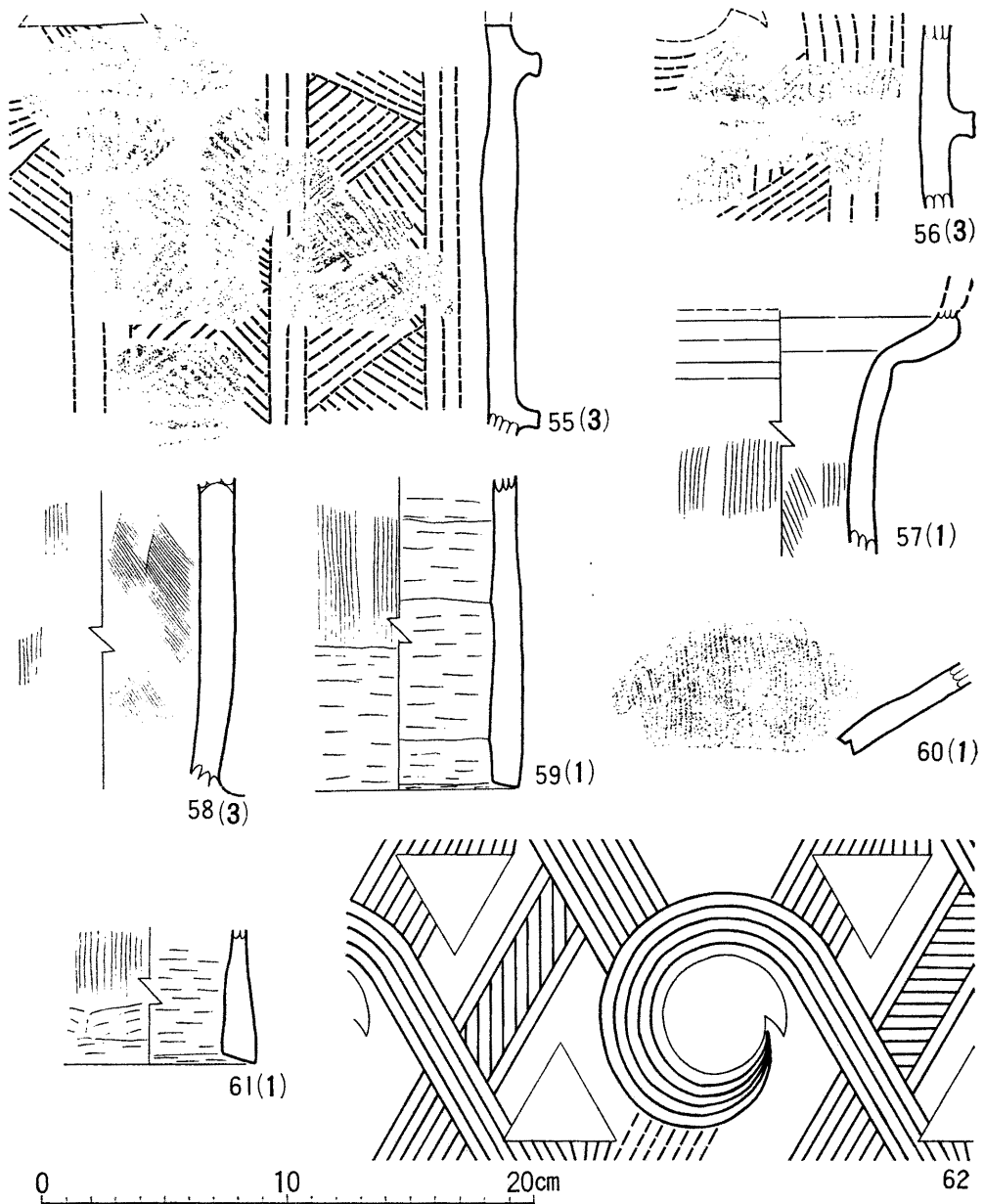
がある。12・13・15は、この文様の斜線文の一部が、縦または横方向の直線で充てんされ、第5図62のように推定復元されるものであろう。もっとも、この類では、葎手文または巴形透孔の存在を確認できないので、円弧を描く沈線と透孔とは、それぞれ重圏文と円窓の一部である可能性がある。そして斜線文の見出されない14も、同じ可能性を否定できない。さらに41は、基本的な文様の斜線文とも解されるが、長い縦方向に近い直線文に短い斜線が交接する構図を単位とし、これを横に繰返して並べた文様のようにも見える。

こうした不確定の要素を残しながらも、この種の文様で目立つのは、右下りの斜線が長く伸び、左下りの斜線を遮る形が多いことである。

さて、大別される文様の他の一種は、1〜3本の縦の沈線で、突帯にはさまれた段を区画し、この長方形の中を複合鋸歯文で充てんした単位を横に連続させるものである。49〜56がこれに属し、55はその典型である。この種の文様は、実例こそ見出されないが、方形の透孔が存在しても、その構図のうえでは一向に差つかえがなからう。またこの種類は、前述の種類の文様と同一個体に施こされることのあることは、56により明らかで、49や50もその一例と解される。

以上のいづれの種類にも属さないものとして42がある。どのような構図の一部なのか、管見のうちに類例を知らないが、円弧を描く弧線が認められるので、前者の種類に属するものであろう。

基底部（第5図59〜61）



第5図 大市墓の出土品(縮尺 1/3)

破片数がわずかなので、はっきりしたことは判らない。60は、壺形埴輪の底部破片かも知れないように、図示した傾きのものかも知れない。59・61はともに直立するようで、外面に縦方向のハケ目を施した上を横方向のヘラ削りを加え、内面および端部も横方向のヘラ削りである。

三

以上、大雑把に紹介してきた大市墓の出土品について若干の補足とまとめをしておこう。

まず、これらの遺物の出土位置について注目されるのは、第2地点が後円部墳頂平坦面、第3地点が後円部第5段の立上り、第4地点が前方部墳頂の背後にあたる場所であることである。とくに第4地点では、壺形土器片が、カマボコ状に横たわる墳頂部に平行するように散布し、いくつもの密集した破片群として出土したことは、出土遺物の原位置が不明のなかにあつて何がしかの示唆を与えるものであろう。

また、前方部と後円部とは、出土品の種類に大きな違いのあることも注目される。すなわち、前方部の第4地点の出土品は、もっぱら土師器の壺で占められている。唯一の例外である特殊器台形の埴輪片35は、小さな破片にすぎず、しかも地表下10センチほどの表土層中からの出土であつてみれば、二次的な移動による混入かと疑われる。これに対し後円部の第1〜3地点からは埴輪と呼んでさしつかえないものだけが出土

している。しかもそれらの中には、岡山県下に発見例が多く、その祖形がセットをなす特殊壺と特殊器台に求められるものも含まれている。

壺形土師器は、小さな丸底や口縁部の明瞭な段など古い色彩をとどめながらも、クシ描き文や円形竹管文などが見えないことと相俟つて胴部の球形化やヘラ削りの手法、口縁端部の肥厚など新しい様相が豊かである。おそらく東海地方の影響のもとに畿内で採用されたであろう庄内式の壺形土師の系譜を継ぐものである。内面の接合痕を消残するような粗雑な糙えや底部の穿孔など壺としての日常機能を否定しながら、形も大きく、胴上半部から上、なかでも有段の口縁部を強調するとともに内外面を赤色塗彩して装飾性が著しいのも特色といえる。桜井市茶臼山古墳出土土器が類似しているが、色調・胴部のカーブ・一部の口縁部の段の造りには違いがみられる。

壺形埴輪7は、図上復元が誤りないとすれば、上述の土師器壺の形象化したものであるうから、その器形・時期・産出地を同様に考えて大過あるまい。東海のないし畿内的な外反する有段口縁の壺形の土師器と埴輪が、次に述べる吉備地方に起源があると考えられている特殊壺・特殊器台形の埴輪と伴出したことは、重要な問題を提起している。

特殊壺形埴輪6は、岡山県幸岡山・立坂・向木見などの遺跡から出土している特殊壺の系譜をひく土師の形象化した埴輪である。突帯の間に、方形区画の中を格子目でうめる文様・連続鋸歯文や格子目文が施されることが、突帯の繞る胴部が直立せずゆるいカーブを描いて急に

すぼまる肩部に至る器形、大きく穿孔された底部などから、前掲の岡山県下の例品よりも後出的なものといえる。同県男女岩遺跡出土品に近い器形を示している。

特殊壺形の埴輪と同じく、岡山県あたりとの深い関係を示しているのが、特殊器台形埴輪である。沈線による赭手文と斜線文とを組合せ、その構図にしたがって三角形と巴形の透孔を穿つ文様構成、その文様帯が一段おきに配される通則、段のある口頸部、口縁部の連続鋸歯文、12ミリ内外を主として9〜15ミリの厚さの器壁、突出度が高く断面方形で端部中央がくぼんで上下に張出した突帯、太くて深い沈線、縦方向の短いハケ目による外面調整、内面のヘラ削り調整、直立する基底部など、岡山県都月1号墳出土の例品に酷似している。しかし一方では、断面放物線状の突帯(20)の存在、右下りの斜線が主体で左下りの斜線が副次的な斜線文、沈線の条数の多さ、複合鋸歯文の存在、無文帯であるはずの段における施文、内面調整におけるヘラ削りの少なさとハケ目・ナデあるいはフキの多用など、都月例と相違する点として指摘できよう。

大市墓の出土品をこのようにみると、そこには複雑な様相が認められて、既知の型式の中にそっくりそのまま位置づけることは、決して容易ではない。しかしながら岡山県あたりとの強い交渉関係を抜きにしては、また理解することも不可能である。特殊器台形埴輪の前述した様相から、これらを都月型とよばれる型式以降に位置づけることは困難であらう。すなわち、これより以前に岡山県あたりに起源すると考えられ

ている特殊な土器あるいはその埴輪が、畿内それも大和の地でも製作されていたものと解される。このことは、特殊壺を形象化した埴輪や特殊器台形埴輪における複合鋸歯文など、都月型では既に失なわれた古い様相が大市墓出土品に存在することによってもいえる。大市墓の土師器壺も、布留式併行とされる都月1号墳出土の土器よりも、どちらかといえば先出的ではないかと疑われる。

このように理解してよいとすれば、岡山県下の特殊器台やその埴輪の規範から逸脱した大市墓出土品の様相たとえば無文のはずの段における施文、赭手文を中心とする文様と複合鋸歯文との同一個体における共存、斜線文内部の方形区画の沈線による充てんなどは、畿内が吉備地方の影響をうけ、さらにこれを土着化させて変容させつつある姿と考えるのも一案であらう。

その当否はともかくも、埴輪の原形と考えられているものが、畿内の超大型の前方後円墳から出土した事実興味深いことである。

小稿を草するには、岡山大学教授近藤義郎氏、東京教育大学助教岩崎卓也氏、京都大学助手都出比呂志氏、岡山県総合文化センター文化係長高橋護氏、奈良県立橿原考古学研究所調査課長石野博信氏、畏友甲元真之、加納俊介両氏のお世話とご教授に負うところが大きい。記して謝意を表する次第である。

(笠野 毅)